

各国農業普及事情の比較分析 <その 1>

はじめに

国際耕種は、これまでにシリア、パレスチナ、スーダン、ウガンダ、エチオピア、パキスタンなど、海外における農業・農村開発プロジェクトに参画してきた。現場では、農民ないし住民を最終の受益者とし、技術移転と生計向上をめざした活動をかさねてきたが、これらの業務は「農業普及員」と呼ばれる人々をカウンターパートとして協働することが多かった。彼らは多くの場合、地方自治体などに所属する公務員であったが、時には民間や NGO などに所属する人々もいた。彼らの職務もまた国や所属先によって様々ではあるが、「農業普及員」に一樣に共通する職務は、農家に対する技術指導や有用情報の伝達をになうことである。したがって、我々が各国の農業・農村開発に携わる際は、有用技術の開発と共に、農業普及員の能力強化は重要な活動であった。そして共に業務するにあたっては、カウンターパートとして信頼関係を構築しながら、現場に最適な技術移転や農家の能力強化の方法を一緒に模索してきた。

現場で普及活動をしていると、各国特有の普及事情に遭遇することがある。たとえば、ある国の「農業普及員」は大学卒の学位を持つ農業技術者として、社会的に一目おかれていたが、実際には専門性や技術力が十分でないことから、農家を訪問するのを嫌がったり、逆に虚勢をはって農家から冷笑されたりということがあった。またときには権力を振りかざし、強権的にふるまう場面もあった。しかしながらプロジェクトが研修や協働を通じて、彼らの弱点である専門性や技術力を補完するように工夫すると、彼らが自信と余裕を持って、農家に接するようになったという場面を何度も見てきた。国際耕種が携わっている JICA 筑波センターの研修事業においても「研修のおかげで自信を持って農家を訪問できるようになった」という帰国研修員の声は非常に多い。一方、別の国では「農業普及員」には一定レベルの専門性・技術力があつたが、農業生産の現場をカバーするには普及体制・職員数が十分ではなく、農家に普

及サービスが十分に届いていないということがあつた。また各専門家の縄張り意識が強く、チームワークが脆弱だったということもあつた。これらの国では、研究機関をふくめていかにヨコの連携を図るかが活動のおおきなテーマとなった。

このように各国の農業普及員や普及事情に注目すると、それぞれの国の農業普及の特色が見えてきて興味深い。これまでの AAI ニュースでも、様々な話題の中で農業普及員や普及事情についてとりあげる機会があつたが、多くは個別の事例として国別に紹介してきた。そこで本シリーズでは、各国の普及員や普及事情を横断的に比較分析することで、相違点を明らかにし、今後の活動へのヒントを探ってみたい。比較分析は定量的な情報ではなく、国際耕種の社員が今まで携わった業務経験をベースにブレインストーミングを行いながら進める。先の意見交換では数ある農業普及のポイントから①普及員・組織の「技術力」、②予算・人員・体制等の「組織力」、③試験場や民間など他組織との「連携力」、そして④「農家との距離」を本シリーズの切り口として選んだ。今後、この4つの切り口からこれまで携わった各国の普及業務や普及事情について、社員間で意見を交わし、記事を作り上げていく。加えて、読者の皆様からも、ご意見を賜ればより多角的な議論が展開できるのではないかと期待している。本シリーズを通じて、皆様と一緒に議論を深めていければ幸甚である。



農家にスイカの整枝方法を指導する普及員
(ウガンダ)